

所属・氏名（健康科学部 心理学科 氏名：鹿嶋 達哉）

著書、学術論文等の名称		単著 共著 の別	発行又は発表 の年月	発行所、発表雑誌 等又は発表学会等 の名称	概 要
1	(学術論文) 「発達のモラルレジリエンス」 モデルの提案－思春期にお ける悪との接触に対する青年 期のとらえ直し－	単著	2017 年	『広島国際大学心理 学部紀要』, 5 巻, 55-66.	思春期はさまざまな悪と接触し、それは自己・仲 間・大人・社会に対する見方・関わり方に影響を 及ぼす。悪との接触は不可避であるため、青年 期に思春期の体験をとらえ直すことにより、悪へ の対処法・見方・つきあい方を自分のものにして いくことが青年期に求められる。発達のモラルレ ジリエンスモデルを提案し、悪への対処法とその 影響からの回復・成長過程を研究する必要性・ 重要性と研究課題について考察した。
2	(学術論文) 大学の講義におけるナラティ ヴの生成・社会的構成と継承 思春期の悪との接触体験の語 り直しを例に	単著	2019 年 12 月	『広島国際大学心理 学部紀要』, 7 巻,37 -49.	大学の講義において学生が記述する個人的体 験を一つのナラティヴ・物語としてとらえ、それが 体験の理解、自己の形成、および体験のとらえ 直し・語り直しに対して持つ意味、それが成立す るための文脈としての講義の特徴を検討した。講 義は教員と学生(複数)の語りの循環をもたらし、 学生の過去の体験や自己の理解につながる。さら に、思春期における悪との接触をとらえ直す・ 語り直す契機と講義がなりうることから、講義形 式における心理教育の可能性も示唆された。
3	(実践報告) 「自由に考えさせる大講義」に おける主体的・対話的で深い 学び～新しい学びに求められる 枠組み作り～	単著	2019 年 12 月	『広島国際大学教育 論 叢 11 号』, 73-93.	「主体的・対話的で深い学び」に必要な要件を、 学生から「考えさせられる」と評価された授業から 検討した。学生は集中できる教育環境の中で、 身近な問題や映像資料、教員の体験談等から 具体的に学び、高い学修意欲を持ちながら「考 えさせられる」体験を持った。その結果、知識・理 論を修得することに加え、異なる立場や多様な 視点から考えるようになった。また、自己の過去 の経験と照合しながら、自己の経験と心理学の 内容を理解した。学修は役に立つ・ためになると 評価され、次の課題・発展につながっていた。
4	(学術論文) ホームレス問題と道德教育 ～受講による学生の見方の変 化と教科「道德」～	単著	2020 年 2 月	『広島国際大学総合 教育 センター 紀 要』,4 号』, 35-53.	大学生がホームレス支援者の講演を聞くことにより「本人の責任を重視する」見方から「社会問題を重視する見方」へ変化することが示された。さらに、教科「道德」における自主・自律、節度、遵法精神・公德心、社会正義、社会参画・公共の精神、勤労、家庭生活の充実、集団生活の充実等の重視が、ホームレス生活(者)を否定・排除する背景・理由づけとなる危険性が示唆された。あるべき姿を教える道德教育に対して、現実の悪への向き合い方を考える発達のモラルレジリエンスモデルの可能性も考察した。
	(学術論文) 思春期における悪との接触に 対する青年のとらえ直し(7)～ 悪の文脈としての仲間関係の 多義性・拮抗性・両極性～	単著	2021 年 2 月	『広島国際大学総合 教育 センター 紀 要』,5 号』	大学生の自由記述から思春期の仲間関係は、 行動・感情を共にし、自分を出せる濃い関係を作 る一方で、周囲とぶつかるか、周囲に合わせる、 個を出さないように対応するため、悩んだり関 係から離脱したりすることが示された。仲間関係 は 1)「社会に合わせる」ことは「自分を出せない」 とも言える多義性、2)「接近・傷つきと距離化・淋 しさ」のような拮抗性、3)「周囲に合わせすぎる～ 合わせられない」のはざまで揺れ動く両極性とい う特徴を有し、悪は 1') 自己主張ともいえる多義 性、2') 葛藤の解決(拮抗性)、3') 一極から他極 への反動(両極性)のような「負の否定としての 正」の意義を持つことが示唆された。